

本のぽけっと

5・6年生に
おすすめする本

市川市立図書館



すし食いねえ

吉橋通夫／著 講談社

あごまで落ちるほど
うまい与兵衛ずし

江戸は両国、与兵衛ずしのひとり息子豆吉は十二歳。豆吉が屋台に手伝いに行くと、おとつあんはどこかへ消えてしまう。豆吉はひとりで「さあ、食いねえ、食いねえ、すし食いねえ。」と売り口上をうなりながら、店番をするしかない。

ある日、豆吉が店番中に、屋台の前で若侍が追っ手の侍二人に襲われる。すると、通りがかりのもみじ色の小そでの娘が暴漢を短棒で打ち、若侍を助ける。この娘は有名な松が鮓の娘のおきょうだった。豆吉とおきょうは、若侍の命をかけた秘密を知り、若侍を助けることになる。



大きなたまご

オリバー・バターワース／作 松岡享子／訳 岩波書店



アメリカのニューハンプシャー州にある小さな町フリーダムに住む少年ネイトは、ある朝飼っているめんどりが大きなたまごを産んでいるのを見つめます。まわりが38センチ、重さが1.5キロのそのたまごのせわをすること6週間、ついにたまごがかえり、トリケラトプスという恐竜の赤ちゃんがそこにいました。ネイトは恐竜にアングル・ビーズレーという名まえをつけ、古生物学者のチーマー先生と家族に協力してもらい飼い始めます。ところが、今までだれも見なかったことのない生きている恐竜のうわさは、アメリカじゅうに広まり、大さわぎになります。

ことばや 言葉屋

ことばこ ことたま
言葉箱と言葉珠のひみつ

久米絵美里／作 もとやままさこ／絵 朝日学生新聞社

言葉って大事だね！

小学校5年生の詠子は、おばあちゃんの仕事は小さな雑貨屋だと思っていました。でも、本当は言葉を口にする勇氣と口にしない勇氣を提供するお店、「言葉屋」でした。ある日おばあちゃんの仕事に興味をもった詠子は、言葉屋の工房をのぞいてしまいます。そこには、言えなかった言葉を閉じ込めた言葉箱や、言いたいことが伝えられない人に勇氣を与える言葉珠など、不思議なものがいっぱいありました。言葉職人を目指すことになった詠子は、言葉屋の仕事の修行をするうちに、大切なのは、どんなに不格好でも、言葉は自分で考えて相手につたえなければいけない、ということだと気づいていきます。

★「言葉屋」の本はシリーズがあります。



野生動物の獣医師という仕事には、お手本も、教科書もない。

やせいどうぶつ
野生動物のお医者さん

さいとうけいすけ 齊藤慶輔 / 著
こうだんしゃ 講談社



くしろしつげん 釧路湿原の中にある野生動物保護センターに「動けなくなっているオジロワシが発見された」という知らせが入りました。このような通報がはいるとかけつけるのが、野生動物の獣医師として働く著者の齊藤先生です。野生動物の獣医師の仕事は、傷を治して終わりではありません。「野のものは野に帰す」、オジロワシが自然の生活にもどれるようにすることが最後のゴールです。

ぜつめつ 絶滅の危機におちいった野生動物の目の前のありさまを知り、人間と野生動物がいっしょにくらしていくために私たちはなにをすべきなのでしょう。



おおつなみ
大津波のあとの生きものたち

ながはたよしゆき 永幡嘉之 / 写真・文

しょうねんしゃしんぶんしゃ 少年写真新聞社

2011年3月11日、大きな津波が東北地方の海岸をおそった。

大きな波は、てい防を乗り越え、人々の住む町をこわし、田や畑を流した。そして、たくさんの人がなくなった。津波がおそって2年後、何もかもがなくなってしまったと思っていた砂浜には、根が残ったハマヒルガオやハマナスのお花畑が広がっていた。生き残った虫たちは、津波の前よりもふえていた。津波によって人々が作り上げたものはこわれたが、動植物はもともとの自然な姿を取りもどしていた。



「本のぽけっと」は、図書館から小学生のみなさんにおすすめしている本のリストです。



年に2回、最新号と基本版を各市立小学校に配布、市立図書館、関連施設でも配布しているほか、

バックナンバーはホームページでもご覧いただけます。また、ここで紹介している本は市川市の図書館でかりることができます。

中央図書館 平田図書室 自動車図書館 行徳図書館 信篤図書館 南行徳図書館 市川駅南口図書館